『東京大学言語学論集』**43** (2021.10) 349-363

満洲語シベ方言の語頭における [jɪ] と [ʔi]

王　海波
haibohaipo@163.com

キーワード：満洲語　シベ方言　中和　歯擦音

要旨

満洲語シベ方言において、語頭の [jɪ] と [ʔi] は音韻的に区別される。Kubo (2004) は両者の音素をそれぞれ ye と i と表記している。本稿ではこの問題に関する次の 2 点について考察を行った。(1) 共時的には、[jɪ] の音韻形式を ye に設定する方が合理的だと示唆する現象と yi に設定する方が合理的だと示唆する現象のどちらもあり、どちらか 1 つに設定するよりは、決まった環境（語頭の [j] の後）における母音音素の e と i の中和と考える方が良いと考えられる。(2) 通時的には、シベ方言の語頭の [jɪ] と [ʔi] のどちらも主に満洲古典語の i または e に由来する。古典語の i に由来する [jɪ] と [ʔi] の分布は音韻的に決められ、語幹における歯擦音（sibilant）の有無に関係するが、古典語の e に由来する [jɪ] と [ʔi] の分布は語彙的に決められる。

1. はじめに

1.1. 満洲語の概要

満洲語は満洲・ツングース系の言語であり、元々清国（1616-1912）を建てた満洲族の言語である。満洲語の古典語[1]（以下「古典語」）は 17 世紀から 18 世紀末にかけて清国で使用された満洲語を指す。口語としての満洲語は中国黒龍江省の数地点の数十人位の満洲族と新疆ウイグル自治区のチャプチャルシベ自治県等の約 1 万 7 千人のシベ族によって話されている（津曲 1992: 203）。本稿で扱うシベ方言[2]は、現在チャプチャルシベ自治県で話される満洲語の方言である。

1.2. 本稿の目的

Kubo (2004, 2008) はシベ方言の語頭の [jɪ] と [ʔi] が音韻的に区別されることを指摘している。また、Kubo は [jɪ] の音素を yi ではなく ye に設定している。本論では、[jɪ] の音

---

[1] 本稿の古典語の形式は主に 1795 年に刊行された『五体清文鑑』に従う（具体的な資料は田村ほか 1966-1968 である）。本稿の古典語の表記は Möllendorff (1892) が提案したメレンドルフ表記に従うが、次の 3 点において異なる表記をする。(i) 早田（2003）に従い、古典語の u と ū を同じ音素と見なし、同じ記号（u）を用いる。(ii) 早田（2003）に従い、古典語の軟口蓋の阻害音（k, g, x）と口蓋垂の阻害音（q, ɢ, χ）を異なる音素と見なし、異なる記号を用いる。(iii) モレンドルフ表記の ng を ŋ で表記する。

[2] シベ方言には次のような音素と異音があると考えられる。/p/ [p(ʰ)], /b/ [b ~ p(ʰ)], /m/ [m], /f/ [f], /t/ [t(ʰ)], /d/ [d ~ t(ʰ)], /n/ [n ~ ɲ], /s/ [s ~ z ~ ɕ ~ ʑ], /š/ [ʂ ~ ʐ], /c/ [t͡ʂ(ʰ) ~ t͡ɕ(ʰ) ~ ʂ ~ ɕ], /j/ [d͡ʐ ~ d͡ʑ ~ t͡ʂ(ʰ) ~ t͡ɕ(ʰ) ~ ʂ ~ ɕ], /l/ [l ~ ɹ ~ ɭ], /r/ [ɾ ~ r], /k/ [k(ʰ)], /g/ [g ~ k(ʰ)], /ŋ/ [ŋ ~ ɴ], /x/ [x ~ ɣ], /q/ [q(ʰ) ~ χ], /ɢ/ [ɢ], /χ/ [χ ~ ʁ], /N/ [ɴ̃ ~ n ~ m ~ ŋ ~ ɴ ~ ɲ], /y/ [j, ʲ], /w/ [v ~ ʷ ~ ʋ ~ w ~ f], /i/ [i], /u/ [u ~ y], /e/ [ɜ ~ ɤ ~ ɯ ~ ɨ], /a/ [a ~ ɛ], /o/ [ɔ ~ ø ~ œ]。

素設定について更なる考察を行うほか、シベ方言の語頭の [jɪ] と [ʔi] が古典語でどのような形式をとるか、そして語頭に [jɪ] と [ʔi] を持つシベ方言の語と古典語の同源語の間にどのような対応関係があるかについて考察を行う。

1.3. 先行研究

Kubo (2004, 2008) は次のようなミニマルペアを挙げて、シベ方言の語頭の [jɪ] と [ʔi] は音韻的に区別されていると指摘している。

(1a)　[jɪːvɣəi] 'has become full'

(1b)　[ʔiːvɣəi] 'has played'

また、Kubo (2004, 2008) は語頭に [jɪ] と [ʔi] を含む他の例も挙げている。例えば、次のようなものがある。

(2a)	[jɪː] 'maggot'	(3a)	[ʔitʂaqw] 'uncomfortable'
(2b)	[jɪˈlãː] 'three'	(3b)	[ʔitʂɜː] 'new'
(2c)	[jɪˈlim] 'lick-present'	(3c)	[ʔitʃim] 'dye-present'

Kubo (2004, 2008) が指摘しているように、シベ方言の語頭の [jɪ] と [ʔi] は音韻的に区別される。[ʔi] の音韻標識は i に設定できると考えられるが、[jɪ] の音韻標識について、Kubo (2004, 2008) は yi ではなく、ye に設定しており[3]、次の 2 点の根拠を挙げている。根拠 1 は音声的事実に基づく根拠であり、根拠 2 は音韻体系に基づく根拠であると考えられる。

(4)　根拠 1　the vowel of [jɪ] is typically lower than [i] so that it can also be transcribed [e] in some cases (Kubo 2008: 132)

　　根拠 2　if [jɪ] were analyzed as /yi/, the language would have the sequence of /yi/, /yu/, /yo/, /ya/ but not /ye/. This system seems strange in that front vowel /i/ can follow /y/, whereas back vowel /e/ cannot (Kubo 2008: 132)

上記の根拠 1 では、[jɪ] の母音は典型的な [i] より低く、[e] と書いてもいいと述べ、それをもって、[jɪ] の音素を yi ではなく ye に設定する 1 つ目の理由として挙げている。しかし、e の代表的な異音は [ɜ] であり、[e] ではない。たとえ [jɪ] の母音を [e] と書けるとしても、それは [jɪ] の音素は ye であるということの十分な根拠にはならないと考えられる。

また、上記の根拠 2 では、[jɪ] を yi に設定する場合、yi のような「y＋前母音」があるのに対して ye のような「y＋後母音」がないという体系がおかしいと述べ、それをもって、[jɪ] の音素を yi ではなく ye に設定する 2 つ目の理由として挙げている。しかし、シベ方言には

[3] 一方、久保ほか（2011a）の記録では、ye に設定する場合の例と、yi に設定する場合の例が共にある。具体的には、[jɪʁãː]「牛」の音韻表記は久保ほか（2011a: 75, 117）では yeχaN となっているが、久保ほか（2011a: 83）では yiχaN となっている。

ya, Cya, yo, Cyo, yu, Cyu を含む語はあるが、Cye を含む語はない[4]（C＝子音音素）。したがって、[jɪ] を ye に設定する場合、後母音は e だけ、「y＋後母音」があるのに対して「C＋y＋後母音」がない。したがって、[jɪ] を ye に設定する場合の体系にもおかしい面があるといえよう。

2. 共時的考察

前述したように、Kubo (2004) はシベ方言の語頭の [jɪ] を ye に設定している。一方、筆者の調査では、シベ方言の語頭の [jɪ] を ye に設定する方が合理的であると示唆する現象と、yi に設定する方が合理的であると示唆する現象のどちらも観察される。

2.1. ye に設定する理由

シベ方言の語頭の [jɪ] の音韻表記を考察する前に、まずシベ方言の不完全重複について紹介する必要がある。

シベ方言には重複による語形成があり、完全重複と不完全重複に分類できる。完全重複は同じ語幹の繰り返しからなる語形成である[5]。例えば、ani ani [aɲ aɲ]「年々、毎年」（ani [aɲ][6]「年」の完全重複）のような例がある。本稿で扱う不完全重複は、語幹が複数回（普通、2回）現れることで語を形成するが、前半または後半が単独で現れる場合の形式と異なる形式として現れるような重複を指す。シベ方言の不完全重複はいくつものパターンがある。そのうち、次のパターンでは、重複の後半の冒頭の子音が m になるが、他の部分は前半と同様である。したがって、前半と後半の唯一の違いは冒頭の子音であるといえる。

(5a)　beda **m**eda [bɨda: **m**ɨda:]「ご飯」　（cf. beda [bɨda:]「ご飯」）

(5b)　gada **m**ada [gada: **m**ada:]「凸凹」　（cf. gada [gada:]「塊」）

(5c)　gijya **m**ijya [gid͡za: **m**id͡za:]「切れ端」　（cf. gijya [gid͡za:]「切れ端」）

(5d)　tase **m**ase [tʰas **m**as]「雀斑」　（cf. tase [tʰas]「雀斑」）

上記の例にある不完全重複は、筆者が調査した話者が全員許容している。一方、このパターンの不完全重複の例は、話者によって容認度に差が出るものがある。yXlχa [jɪʁa:]「花」（X は i または e を示す。以下同様）という語の上記のパターンの不完全重複は、許容する話者（話者 Si-4 と話者 Si-10 など）と許容しない話者（話者 Si-7 と話者 Si-15 など）が共に

---

[4] 例えば、久保ほか（2011b）が記述したシベ方言の語彙集には **ya**se「目」、**bya**「月」、**yo**nχuN「犬」、**dyo**Nji-「聞く」、**yu**yu-「飢える」、**syu**miN「深い」のような例はあるが、Cye を含む例はない。

[5] 同じ発音の繰り返しは必ずしも語形成としての完全重複を成すとは限らない。同音異義語が連続する可能性があり、その場合、完全重複ではないと考えられる。例えば、シベ方言の dyosi dyosi [dʲœɛ dʲœɛ]「中へ入れ」は、同じ発音 dyosi [dʲœɛ] の繰り返しであるが、前者の dyosi [dʲœɛ] は「中へ」を表す副詞であり、後者の dyosi [dʲœɛ] は「入る」を表す動詞 dyosi- の命令の形式であり、異なる形態素であるため、語形成としての完全重複ではないと考えられる。

[6] 複数音節の語の語末が高母音音素（i, e, u）であり、しかも語末音節が強勢を受けない場合、その高母音（例えば ani の i）が音声的に消えるが、音韻的にはその母音が存在する。これに関しては形態論的操作でその母音が出現するなどの理由があり、詳細は Kubo (2008) を参照されたい。

いる[7]。許容する話者は yXlχa melχa [jɩʁa: miɩʁa:] のような形式は許容するが、yXlχa milχa [jɩʁa: miɩʁa:] のような形式は許容しない。

(6) yXlχa [jɩʁa:]「花」の不完全重複の形式
(a) yXlχa melχa [jɩʁa: miɩʁa:]（許容する話者がいる）
(b) yXlχa milχa [jɩʁa: miɩʁa:]（許容する話者はいない）

前にも述べたように、このパターンの不完全重複では、前半と後半の唯一の違いは冒頭の子音である。[miɩʁa:] と [miɩʁa:] の音韻形式はそれぞれ melχa と milχa である。後半が melχa である場合の形式が許容されるが、milχa である場合の形式が許容されない、という現象は、前半の冒頭の子音を除く形式は elχa であり、ilχa ではない、ということを意味すると考えられる。すなわち、不完全重複のパターンの規則（前半と後半の唯一の違いは冒頭の子音である）[8]と後半の音韻形式（melχa）から、前半の音韻形式は yilχa ではなく、yelχa であるということがわかる[9]。

2.2. yi に設定する理由

前節では、シベ方言の語頭の [jɩ] を ye に設定する方が合理的だと示唆する現象を述べた。しかし、逆に yi に設定する方が合理的だと示唆する現象も存在する。それを見る前に、まずシベ方言の次のような交替について紹介する必要がある。

1 音節目の母音が i で、2 音節目の母音が a であるシベ方言の語は、その i…a [i…a] が ya…a [ʲa…a] に交替することが可能な語がある。例えば、miχaN [miʁã:]「子豚」は、myaχaN [mʲaʁã:] のような交替形式がある。この語の ya…a [ʲa…a] の交替形は、筆者が調査した話者は全員許容しているが、i…a [i…a] を含む他の語の ya…a [ʲa…a] の交替形は、許容する話者としない話者のどちらもいて、個人差が見られる。まとめると、次表のようになる。

---

[7] Si-4 などにある数字は話者と筆者が知り合った順で振った数字である。ここで言及した 4 人の話者の情報は次のようである。Si-4 は 2 郷出身の 30 代男性、Si-10 は 6 郷出身の 30 代男性、Si-7 は 3 郷出身の 30 代男性、Si-15 は 6 郷出身の 30 代女性である。

[8] 前にも述べたように、このパターンの不完全重複の特徴は後半の冒頭の子音が m になることである。また、このパターンの不完全重複の他にもいくつかのパターンの不完全重複が存在する。しかし、後半の冒頭の子音が m になり、しかも後半の最初の母音が i から e になるような不完全重複の例はない。したがって、[jɩʁa: miɩʁa:] を yilχa melχa と考え、同類の例がない新しいパターンの不完全重複と考えるよりは、yelχa melχa と考え、(5)のパターンに属すると考える方が妥当だと考えられる。

[9] (5)のような m-不完全重複の語形成は非生産的であり、[jɩ] を語頭に持つ語で m-不完全重複を確認できた例はこれまでの調査ではこの一例のみである。

表 1：シベ方言の [i…a] が [ʲa…a] に交替する形式の許容度

	i…a [i…a]	ya…a [ʲa…a]	話者 Si-8	話者 Si-5	話者 Si-15	意味
1	bilχa [biɩʁa:]	byalχa [bʲaɩʁa:]	－	＋	＋	喉；首
2	biχa [biʁa:]	byaχa [bʲaʁa:]	－	－	＋	小片
3	ciχale-mi [t͡ɕʰiʁaɩ:m]	cyaχale-mi [t͡ɕʰaʁaɩ:m]	＋	＋	＋	好きだ
4	fila [fila:]	fyala [fʲala:]	－	＋	＋	皿
5	jilχaN [d͡ʑiɩʁã:]	jyalχaN [d͡ʑaɩʁã:]	－	＋	＋	音
6	jiχa [d͡ʑiʁa:]	jyaχa [d͡ʑaʁa:]	－	＋	＋	お金
7	miχaN [miʁã:]	myaχaN [mʲaʁã:]	＋	＋	＋	子豚
8	sidare-mi [ɕidaɾim]	syadare-mi [ɕadaɾim]	－	－	＋	伸ばす
9	sira-mi [ɕiɾam]	syara-mi [ɕaɾam]	－	－	＋	連結する
10	bira [biɾa:]	*byara [bʲaɾa:]	－	－	－	川
11	biχaN [biʁã:]	*byaχaN [bʲaʁã:]	－	－	－	野原
12	fisa [fiza:]	*fyasa [fʲaza:]	－	－	－	背中

注：(i) プラス記号は当該の話者が ya…a [ʲa…a] の交替形を許容することを示す。マイナス記号は当該の話者が ya…a [ʲa…a] の交替形を許容しないことを示す。(ii) どの話者もその交替形を許容しない場合、その前にアステリスクをつける。(iii) どの話者もその交替形を許容しない語は 10/11/12 の他にもあるが、スペースの関係で省略した。上記の(i)(ii)(iii)の 3 点は以下の表 2 と表 3 も同様である。(iv) 話者の情報は次のようである。Si-8 は 8 郷出身の 70 代男性である。Si-5 は 7 郷出身の 30 代男性である。Si-15 は 6 郷出身の 30 代女性である。

i…a [i…a] の ya…a [ʲa…a] への交替は、すなわち i [i] の前の子音が硬口蓋化している状態での、i [i] から a [a] への交替である。事実上、i [i] の前の子音も硬口蓋化しているため、音声記号で記述すると [ʲi…a] と [ʲa…a] の間の交替である。すなわち、a [a] を含む音節の前の音節における i [i] と a [a] の交替である。これは母音の広さの逆行同化であると考えられる。

上表で示したように、このような同化による交替は a の前の i と a の間では可能な語と可能でない語のどちらもある。しかし a の前の e と a の間では、このような同化による交替が可能な語は観察されない。例えば、次の beda [bɜda:] は、*bada [bada:] には交替しない。

表 2：シベ方言の [ɜ…a] が [a…a] に交替する形式の許容度[10]

i…a	e…a	話者 Si-8	話者 Si-5	話者 Si-15	意味
beda [bɜda:]	*[bada:]	―	―	―	ご飯
feta [fɜta:]	*[fatʰa:]	―	―	―	ロープ
tewa [tʰɜva:]	*[tʰava:]	―	―	―	そこ、あそこ

一方、yX…a [jɪ…a] の場合、ya…a [ja…a] に交替することが可能な語と可能でない語のどちらもある。

表 3：シベ方言の yX…a [jɪ…a] が ya…a [ja…a] に交替する形式の許容度

X…a	a…a	話者 Si-8	話者 Si-5	話者 Si-15	意味
yXla-mi [jɪlam]	yala-mi [jalam]	―	―	＋	立つ
yXlaN [jɪlã:]	yalaN [jalã:]	―	＋	＋	3
yXlχa [jɪʁa:]	yalχa [jaɪʁa:]	―	＋	＋	花[11]
yXlχa-mi [jɪʁam]	yalχa-mi [jaɪʁam]	―	―	＋	区別する
yXqaN [jɪqʰã:]	yaqaN [jaqʰã:]	―	＋	＋	漢人
yXχaN [jɪʁã:]	yaχaN [jaʁã:]	―	＋	＋	牛
yXfqa-mi [jɪfqʰam]	*yafqa-mi [yafqʰam]	―	―	―	減る
yXra [jɪɾa:]	*yara [jaɾa:]	―	―	―	黍

表 1 と表 2 からわかるように、a の前における i と a の交替が可能な語があるが、a の前における e と a の交替が可能な語は観察されない。また、a の前における yX [jɪ] と ya [ja] の交替が可能な語がある。すなわち、yX [jɪ] の母音は、e より i に近い振る舞いをしているといえる。したがって、この現象は [jɪ] の音韻形式は ye より yi の方が合理的であるということを示唆しているといえよう。

2.3. 中和

2.1. 節の現象では、シベ方言の語頭の [jɪ] の母音は i より e の方に近い振る舞いをしている。一方、2.2. 節の現象では、シベ方言の語頭の [jɪ] の母音は e より i の方に近い振る舞いをしている。したがって、シベ方言の語頭の [jɪ] を yi に設定しても ye に設定しても、ま

[10] 古典語では e と a は母音調和で異なるグループの母音であるため、語幹では原則として共起しない（Zhang 1996: 44）。したがって、シベ方言の語幹における e と a の共起の例も少ない。具体的には、e と a が歴史的にもともと 2 つの形態論的要素に属していたと考えられる場合と、唇子音＋e の場合（この場合の e は u から変化したものである）のみである。詳細は王海波（2020: 137）を参照されたい。

[11] 話者 Si-5 は、yalχa [jaɪʁa:]「花」は許容するが、同じ語形の yalχa [jaɪʁa:]「区別しろ」は許容しない。この現象からわかるように、このような交替形が可能かどうかは、音韻的に決められるのではなく、語彙的に決められる可能性がある。

ったく問題にならないとは言えないと考えられる。そのため、無理してどちらか 1 つに設定するよりは、ye でも yi でもある、すなわち決まった環境（語頭の y [j] の後）における母音音素 e と i の中和（neutralization）と考える方が良いと考えられる。中和に関しては、Lass (1984: 49-51) は 5 つに分類しており、そのうちの 4 つは相対的に簡単であると述べている。その 4 つの種類の中和は次のようである。

[1] **1 番目の中和**：2 つの音素 a と b は決まった環境では a しか現れない。例えば、ドイツ語の無声破裂音と有声破裂音は、語末では無声破裂音しか現れない。

[2] **2 番目の中和**：2 つの音素 a と b は決まった環境 1 では a しか現れず、決まった環境 2 では b しか現れない。例えば、フランス語の /e/ と /ɛ/ は語末では対立がある（例：les /le/ vs. lait /lɛ/, aller /ale/ vs. allait /alɛ/）が、語末ではない開音節では /e/ しか現れず（例：été /ete/, étais [etɛ]）、閉音節では /ɛ/ しか現れない（例：laide /lɛd/, maître /mɛtr/）。

[3] **3 番目の中和**：2 つの音素 a と b は決まった環境では（a の代表的な異音ではなく、b の代表的な異音でもない）c として現れる。例えば、アメリカ英語の母音間の t と d は共に [ɾ] として現れる。

[4] **4 番目の中和**：2 つの音素 a と b は決まった環境では a の代表的な異音として現れることも b の代表的な異音として現れることも可能である。例えば、デンマーク語の /p/ も /b̥/ も、語末では [pʰ] と [b̥] の間で揺れる。

シベ方言の語頭の [jɪ] の母音音素はもし e と i の決まった環境（語頭の [j] の後）における中和と考えるなら、3 番目の中和に当てはまると考えられる。e の代表的な異音は [ɜ] であり、i の代表的な異音は [i] である。しかし、語頭の [j] の後という決まった環境では、[ɜ] でも [i] でもない [ɪ ~ e] として現れる。この現象はまさに 3 番目の中和に当てはまると考えられる。

シベ方言の [jɪ] の母音音素は決まった環境（語頭の [j] の後）における e と i の中和と考えられるため、以降では [jɪ] の音韻表記を yI に設定することにする。ここの大文字の I は中和を表すための便宜的な記号である（もっとも、大文字の E を用いて yE に設定することもできるが）。

3. 通時的考察

1.3. で述べたように、シベ方言の語頭の [jɪ] と [ʔi] は音韻的に区別される。本節では、語頭に [jɪ] [ʔi] を含むシベ方言の語と古典語における同源語を対照する上で、[jɪ] [ʔi] が古典語のどの音に対応するか、その対応にどのような要素が関わるかについて考察する。

3.1. シベ方言の語頭の [jɪ] と [ʔi] の由来

[jɪ] [ʔi] で始まるシベ方言の語と古典語における同源語を比較してみると、シベ方言の語頭の [jɪ] [ʔi] に対応する古典語の形式は i, ni, e, ye の可能性があるということがわかる[12]。

[12] 稀に u の可能性もある（3.4. 節を参照されたい）。

3.2.-3.5. 節で各場合の例を見る。

表 4：シベ方言の語頭の [jɪ] [ʔi] に対応する古典語の形式

シベ方言 / 古典語	yI [jɪ]	i [ʔi]
i	古典：ira シベ：yIra [jɪraː] 意味：「黍」	古典：ice シベ：ice’ [ʔit͡ɕʰɜː] 意味：「新しい」
ni	古典：niqan シベ：yIqaN [jɪqʰãː] 意味：「漢人」	古典：ninju シベ：iNje [ʔin͡ʃʰ] 意味：「60」
e	古典：ebi-mbi シベ：yIwi-mi [jɪvim] ~ yIwe-mi [jɪvɨm] 意味：「満腹になる」	古典：efi-mbi シベ：iwi-mi [ʔivim] ~ iwe-mi [ʔivɨm] 意味：「遊ぶ」
ye	古典：yeye シベ：yi [jɪː] 意味：「蛆」	（未発見）

3.2. 古典語の i に由来するシベ方言の語頭の [jɪ] と [ʔi]

次の古典語とシベ方言の同源語では、古典語の語頭の i とシベ方言の語頭の [jɪ] [ʔi] の対応が見られる。

表 5：古典語の語頭の i とシベ方言の語頭の [jɪ] [ʔi] の対応

	古典語	シベ方言	意味
1	**i**baɢan	**yI**waχeN [**jɪ**vaʁũː]	怪物
2	**i**bqambi	**yI**wqa-mi [**jɪ**vqʰam]	減る
3	**i**ja	**yI**ja [**jɪ**d͡ʐa:]	虻
4	**i**qtambi	**yI**qta-mi [**jɪ**qtam]	積む
5	**i**lan	**yI**laN [**jɪ**lã:]	3
6	**i**lembi	**yI**le-mi [**jɪ**lɨm]	舐める
7	**i**leŋgu	**yI**leŋe [**jɪ**lɨŋ]	舌
8	**i**lɢambi	**yI**lχa-mi [**jɪ**ʁam]	弁別する
9	**i**limbi	**yI**la-mi [**jɪ**lam]	立ち上がる
10	**i**lχa	**yI**lχa [**jɪ**ʁa:]	花
11	**i**na	**yI**na [**jɪ**na:]	姉妹の子
12	**i**nu	**yI**ne [**jɪ**n]	はい
13	**i**ndaχʊn	**yI**NdaχuN [**jɪ**ndaʁõː]	戌
14	**i**ndembi	**yI**Nde-mi [**jɪ**ndɨm]	泊まる
15	**i**ra	**yI**ra [**jɪ**ɾa:]	黍
16	**i**rgen	**yI**rxeN [**jɪ**ɾɣũː][13]	民
17	**i**χan	**yI**χaN [**jɪ**ʁã:]	牛
18	**i**ce	**i**ce’ [**ʔi**t͡ʂʰɜ:]	新しい
19	**i**cembi	**i**ci-mi [**ʔi**t͡ɕʰim]	染める
20	**i**cihiyambi	**i**cyke-mi [**ʔi**t͡ɕkɯm] ~ **i**cyka-mi [**ʔi**t͡ɕkam]	処理する
21	**i**jisχʊn	**i**jisquN [**ʔi**d͡ʑisqõː] ~ **i**jisχuN [**ʔi**d͡ʑisχõː] ~ **i**jisxuN [**ʔi**d͡ʑisxũː]	従順的な
22	**i**jumbi	**i**ji-mi [**ʔi**d͡ʑim]	塗る
23	**i**jurambi	**i**jire-mi [**ʔi**d͡ʑiɾɨm]	擦る
24	**i**ncambi	**i**Ncale-mi [**ʔi**nt͡ʃʰalɨm]	いななく
25	**i**njembi	**i**Nji-mi [**ʔi**nd͡ʑim]	笑う
26	**i**sambi	**i**sa-mi [**ʔi**zam]	集まる
27	**i**sinambi	**i**sine-mi [**ʔi**zinɨm]	着く

表 5 から、シベ方言において語頭に [jɪ] を持つ語と [ʔi] を持つ語のいずれも、古典語において語頭が i である同源語があることが分かる。したがって、古典語の語頭の i はどのような環境でシベ方言の yI [jɪ] になり、どのような環境でシベ方言の i [ʔi] になるか、という

[13] この語は久保ほか（2011a: 123, 2011b: 19, 76）は irxeN と記録しており i で始まるが、筆者が調査した話者の発音は語頭が yI [jɪ] である。山本（1969: 44）の記録 [jurɣɜn] でも語頭は [jɪ] であり [ʔi] ではない。

問題が生じる。

上表の 1-17 番の例では、古典語の語頭の i とシベ方言の語頭の yI [jɪ] が対応する。それに対して 18-27 番の例では、古典語の語頭の i とシベ方言の語頭の i [ʔi] が対応する。18-27 の例の共通している特徴は、語幹[14]に s, c, j のどれかの子音を持つことである。その s, c, j の共通している性質は歯擦音（sibilant）であることである。そして逆に 1-17 の例では、語幹に歯擦音 s, c, j を持つ語は 1 例のみ（3 番）である。したがって、唯一の例外である上表の 3 番を除けば、次のことがいえると考えられる。

(7a) i で始まる古典語の語幹に歯擦音がない場合、シベ方言の同源語の語頭は yi [jɪ] である。

(7b) i で始まる古典語の語幹に歯擦音がある場合、シベ方言の同源語の語頭は i [ʔɪ] である。

なお、i で始まる古典語の語は、2 音節以降に円唇母音があるなら、逆行円唇性同化が発生し、1 音節目の i は円唇母音に変化することがある。例えば、次のような例がある。

表 6：i で始まる古典語の語のシベ方言の同源語で逆行円唇性同化が起こる場合の例

	古典語	シベ方言	意味
1	**i**lduŋɕa	**yu**lduŋe [**jy**ɹduŋ][15]	便利
2	**i**ndaχʊn	**yo**nχuN [**jɔ**nʁõː]	犬
3	**i**qʊmbi	**yo**qu-mi [**jɔ**qʰʊm]	縮む

上表の古典語の 1 音節目の母音は非円唇母音 i であるが、シベ方言の同源語の 1 音節目の母音は円唇母音 u, o である。この円唇母音 u, o は 2 音節目以降にある円唇母音の逆行円唇性同化によると考えられる。また、シベ方言の同源語の語頭は yu [jy], yo [jɔ] になることから、逆行円唇性同化の前は *yI [jɪ] であったことがわかる。古典語の語幹には歯擦音がなく、シベ方言の同源語の語頭が *yI [jɪ] であったということは、上述した(7)と一致している。

上述した(7)からわかるように、シベ方言の同源語の語頭が yI [jɪ] となるか、それとも i [ʔi] となるかは、古典語の語幹における歯擦音の有無に関係がある。語頭の y [j] は歯擦音と相性が悪いようである。i で始まる古典語の語は、語幹に歯擦音があれば、シベ方言の同源語の語頭は yI [jɪ] となるが、語幹に歯擦音がなければ、シベ方言の同源語の語頭は i [ʔi] となる。上記の 2 つの表にある 30 個の例では、(7)と一致しない例外は 1 つのみ（ija）であり、例外率は 3%のみである。

---

[14] 厳密にいうと、「語」ではなく「語幹」である。例えば、古典語の ile-mi「舐める」は語幹 ile- に歯擦音がなく、シベ方言の同源語 yIle-mi [jɪlim] の語頭は yI [jɪ] である。歯擦音を含む屈折接辞 -ci「～なら」がくっ付いた ile-ci「舐めるなら」の形式は、そのシベ方言の同源語 yIle-ci [jɪɹt͡eʰ] の語頭はやはり yI [jɪ] である。したがって、シベ方言の同源語の語頭が [jɪ] か [ʔi] かに関わる要素は語範囲での歯擦音の有無というよりは、語幹範囲での歯擦音の有無と考えられる。

[15] 厳密には [jy], [jɔ] にある [j] は円唇の [ɥ] であるが、本稿ではシベ方言の諸先行研究に倣い、簡略した表記の [j] を使うことにした。

3.3. 古典語の ni に由来するシベ方言の語頭の [jɪ] と [ʔi]

ni で始まる古典語の語は、シベ方言の同源語では ni [ɲi] で始まる語と yI [jɪ] で始まる語と i [ʔi] で始まる語のいずれも見られる。例えば、古典語の nimaχa「魚」、niqan「漢人」、ninju「60」のシベ方言の同源語はそれぞれ nimχa [ɲimʁa:]、yIqaN [jɪqʰã:]、iNje [ʔin͡ʃʰ] である。シベ方言の同源語が yI [jɪ], i [ʔi] で始まる語の場合、シベ方言では語頭の鼻音が脱落したと考えられる。その語頭鼻音の脱落条件は本節で扱う問題ではない[16]。本節で扱うのは、その語頭鼻音が脱落するなら、脱落した後の形式は yI [jɪ] で始まるか、それとも i [ʔi] で始まるか、という問題である。

3.2. 節からわかるように、i で始まる古典語の語は、シベ方言の同源語の語頭が yi [jɪ] になるか、それとも i [ʔi] になるかは、古典語の語幹における歯擦音の有無に関係がある。結論からいうと、ni で始まる古典語の語は、もしその語頭鼻音が脱落するなら、やはりもともと i で始まる古典語の語の場合と同じように、シベ方言の同源語の語頭が yi [jɪ] になるか、それとも i [ʔi] になるかは、古典語の語幹における歯擦音の有無に関係がある。例えば、次表の例を見よう。

表 7：古典語の語頭の ni とシベ方言の語頭の [jɪ] [ʔi] の対応

	古典語	シベ方言	意味
1	**ni**du-mbi	**yu**dunu-mi [**jy**dunum]	呻く
2	**ni**meku	**yu**mku	病気
3	**ni**qan	**yI**qaN [**jɪ**qʰã:]	漢人
4	**ni**ruɢan	**yu**rχwaN [**jy**rʁʷã:]	絵
5	**ni**ru-mbi	**yu**ru-mi [**jy**rum]	画く
6	**ni**nju	**i**Nje [**ʔi**n͡ʃʰ]	60

上表の 1/2/4/5 番の例には前に挙げた表 6 の例と同じような逆行円唇性同化が見られる。1-5 番の例では古典語の語幹に歯擦音がない。この場合、対応するシベ方言の同源語の語頭は yi [jɪ] になる（逆行円唇性同化が発生する場合、yu [jy] になる）。一方、6 番の例では歯擦音 j がある。この場合、対応するシベ方言の同源語の語頭は i [ʔi] になる。この現象は 3.2. 節の(7)と一致している。両節の内容をまとめていうと、もともと i で始まる古典語の語の場合と、ni で始まる古典語の語のその語頭の n が脱落する場合のどちらにおいても、古典語の語幹に歯擦音がなければ、シベ方言の同源語の語頭は yi [jɪ] になり、古典語の語幹に歯擦音があれば、シベ方言の同源語の語頭は i [ʔi] になる。

[16] この鼻音の脱落には法則が観察されなく、散発的な変化のようである。また、同じ語でも、語頭の鼻音が脱落するか否かは話者による場合がある。例えば、古典語の nimeku「病気」はシベ方言では、話者によって nyumku [ɲymkʷʰ], nyuNku [ɲyŋkʷʰ], yumku [jymkʷʰ], yuNku [jyŋkʷʰ] のような形式が観察される。

3.4. 古典語の e に由来するシベ方言の語頭の [jɪ] と [ʔi]

e で始まる古典語の語は、シベ方言の同源語では e [ɜ] で始まる語と yI [jɪ] で始まる語と i [ʔi] で始まる語のいずれも見られる。yI [jɪ] で始まる語と i [ʔi] で始まる語は次表のような例がある。

表 8：古典語の語頭の i とシベ方言の語頭の [jɪ] [ʔi] の対応

	古典語	シベ方言	意味
1	**e**bi-mbi	**yI**wi-mi [**jɪ**vim] ~ **yI**we-mi [**jɪ**vɨm]	満腹になる
2	**e**ri-mbi	**yI**re-mi [**jɪ**ɾɨm]	掃く
3	**e**fi-mbi	**i**wi-mi [**ʔi**vim] ~ **i**we-mi [**ʔi**vɨm]	遊ぶ
4	**e**niye	**i**ni' [**ʔi**ɲiː]	母

上表のどの例においても、古典語の 2 音節目に i があり[17]、古典語の語頭の e がシベ方言で yI [jɪ] と i [ʔi] になるのは i の逆行同化による可能性がある。すなわち、umlaut のような変化である。Umlaut によって語頭の e は yI [jɪ] または i [ʔi] に変化するが、どのような場合に yI [jɪ] となるか、どのような場合に i [ʔi] となるかに関しては、法則が見られない。前述した 3.2. 節と 3.3. 節の歯擦音の有無に関する法則は、この umlaut の場合には通用しないようである。上表の 3 番と 4 番の例は、歯擦音がないにもかかわらず、シベ方言では yI ではなく、i で始まるのである。すなわち、古典語の語頭の e がシベ方言で umlaut で yI/i になる場合、yI [jɪ] となるか、それとも i [ʔi] となるかは、音韻的に決められるのではなく、語彙的に決められるようである[18]。

なお、古典語の語頭の u も上述した umlaut のような逆行同化を受けることがある。例えば、古典語の ufi-mbi「縫う」のシベ方言における同源語は iwi-mi [ʔivim] ~ iwe-mi [ʔivɨm] である[19]。

3.5. 古典語の ye に由来するシベ方言の語頭の [jɪ]

ye で始まる古典語の語は、シベ方言の同源語の語頭は yI [jɪ] になることがあるが、i [ʔi] になる例は筆者の調査では観察されていない。語頭の ye が yI [jɪ] になる例には、yendembi

---

[17] 古典語の eniye は満洲文字に基づく転写であるが、実際の音形は enye である可能性がある。enye はシベ方言では先に nye > ni の変化が起こり、次に 1 音節目の e が 2 音節目の i から同化の影響を受けたと考えられる。なぜなら eniye のシベ方言の同源語は ini' の他に eni' の形式もあるからである。筆者が調査した話者 Si-10 の発音は eni' のような形式である。久保ほか（2011a: 23）も eni' の形式に言及している。すなわち、enye > eni' > ini' のような変化である。eni' > ini' もやはり umlaut の変化である。

[18] シベ方言の語頭の yI と i が音韻的な違いを示すミニマルペア yIwi-mi [jɪvim]「満腹になる」と iwi-mi [ʔivim]「遊ぶ」もこの umlaut の場合の例である。それに対して、3.2. 節と 3.3. 節で述べた古典語の語頭の i とシベ方言の語頭の yi [jɪ], i [ʔi] の対応は、音韻的に（歯擦音の有無に）決められるため、シベ方言の語頭の yi [jɪ], i [ʔi] のミニマルペアが生じにくいと考えられる。

[19] ufi-mbi は古典語の辞書には ifi-mbi の形式もある（胡增益 2020）。その段階ですでにこの umlaut の変化があったと考えられる。

「燃え盛る」のシベ方言の同源語 yINde-mi [jɪndɨm]、yeye「蛆」のシベ方言の同源語 yI [jɪː] などがある。

3.6. まとめ

シベ方言において yI [jɪ] または i [ʔi] で始まる語に対応する古典語の同源語は i, ni, e, ye で始まる。

[1] i, ni で始まる古典語の語は、シベ方言の同源語が yI [jɪ] で始まるか、それとも i [ʔi] で始まるかは、音韻的に決められる。古典語の語幹に歯擦音がない場合、シベ方言の同源語は yI [jɪ] で始まり、古典語の語幹に歯擦音がある場合、シベ方言の同源語は i [ʔi] で始まる。例外は 1 つのみである。

[2] e で始まる古典語の語は、シベ方言の同源語が yI [jɪ] で始まるか、それとも i [ʔi] で始まるかは、語彙的に決められる。

[3] ye で始まる古典語の語は、シベ方言の同源語が yI [jɪ] で始まる例はあるが、i [ʔi] で始まる例は観察されていない。

4. 他の言語における類似する対立

1.3. で述べたように、満洲語シベ方言の語頭の [jɪ] と [ʔi] は音韻的対立を示している。また、他の言語にも類似する対立がある。例えば、Kubo (2004) は日本語首里方言の [jiː]「良い」と [ʔiː]「胃」、ウイグル語の [jilim]「ゴム」と [ʔilim]「知識」の例を挙げている。また、中国語の共通語（いわゆる普通話）にはこのような対立が観察されないが、筆者が調査した電白黎話（中国広東省西部における閩語の一種）には、[ji^{33}]「二」と [ʔi^{33}]「医」などの対立の例がある[20]。なお、英語の yeast と east、year と ear も同じような性質の対立だといえよう。

5. おわりに

満洲語シベ方言の語頭の [jɪ] と [ʔi] が音韻的に区別されることは先行研究ではすでに言及されている。本論ではこの問題に関して、(i) シベ方言の語頭の [jɪ] の音韻形式、(ii) シベ方言の語頭の [jɪ] と [ʔi] の古典語における対応形式、という 2 点について考察を行った。そして、次のことを明らかにした。

[1] シベ方言の語頭の [jɪ] を ye に設定する方が合理的だと示唆する現象（2.1.）と、yi に設定する方が合理的だと示唆する現象（2.2.）のどちらも観察される。ye と yi のどちらか 1 つに設定するよりは、決まった環境（語頭の y [j] の後）における母音音素 e と i の中和と考える方が良いと考えられる（2.3.）。Lass (1984: 49-51) が挙げた中和の 5 つの種類のうちの 3 種類目に当てはまると考えられる。

[20] 筆者が調査した電白黎話の話者潘氏は 20 代女性である。なお、戴由武・戴漢輝（1994: 12-25）が挙げた表（主に 22, 25 頁の表）からもこの対立があることがわかる。

[2] [jɪ] と [ʔi] で始まるシベ方言の語の古典語の同源語は i, ni, e, ye で始まる。i, ni で始まる古典語の語は、シベ方言の同源語が [jɪ] で始まるか、それとも [ʔi] で始まるかは、音韻的に決められる（古典語の語幹に歯擦音がない場合、シベ方言の同源語は [jɪ] で始まるが、古典語の語幹に歯擦音がある場合、シベ方言の同源語は [ʔi] で始まる）。一方、e で始まる古典語の語は、シベ方言の同源語が [jɪ] で始まるか、それとも [ʔi] で始まるかは、語彙的に決められる。なお、ye で始まる古典語の語は、シベ方言の同源語が yI [jɪ] で始まる例があるが、i [ʔi] で始まる例は観察されていない。

参考文献

戴由武・戴漢輝（主編）（1994）『電白方言誌』広州：中山大学出版社.

早田輝洋（2003）「満洲語の母音体系」『九州大学言語学論集』23: 1-10.

胡增益（2020）『新満漢大詞典（第 2 版）』北京：商務印書館.

Kubo, Tomoyuki. (2004) /i/ vs. /yi/ distinction in Sive Manchu? In: Carsten Naeher (ed.), *Proceedings of the 1st International Conference of Manchu-Tungus Studies. Vol.2: Trends in Tungusic and Siberian Linguistics*. 101-107. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

————————. (2008) A sketch of Sibe phonology. *Contributions Towards Research and Education of Language Vol 16 Studies of Languages: From the Viewpoint of Eurasian Languages*. 127-142.

久保智之・児倉徳和・庄声（2011a）『2011 年度言語研修シベ語テキスト 1 シベ語の基礎』府中：東京外国語大学アジア・ アフリカ言語文化研究所.

————————————（2011b）『2011 年度言語研修シベ語テキスト 2 シベ語語彙集』府中：東京外国語大学アジア・ アフリカ言語文化研究所.

Lass, Roger. (1984) *Phonology*. Cambridge: Cambridge University Press.

田村実造・今西春秋・佐藤長（1966-1968）『五体清文鑑訳解』京都 ： 京都大学文学部内陸アジア研究所.

津曲敏郎（1992）「満州語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）『言語学大辞典第 4 巻』pp. 203-205. 東京：三省堂.

王海波（2020）「満洲語現代方言における母音調和」『北方言語研究』10: 135-156.

山本謙吾（1969）『満洲語口語基礎語彙集』府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Zhang Xi. (1996) Vowel Systems of the Manchu-Tungus Languages of China. Unpublished doctoral dissertation, University of Toronto.

The Word-Initial [jɪ] and [ʔi] in the Sibe Dialect of Manchu

WANG, Haibo
haibohaipo@163.com

Keywords: Manchu, Sibe dialect, neutralization, sibilant

Abstract

Word-initial [jɪ] and [ʔi] in the Sibe dialect of Manchu are distinguished phonologically, as mentioned in Kubo (2004). This paper analyzes two aspects of this problem: (1) Synchronically, there are both the phenomenon which suggests the phonological form of [jɪ] is *ye* and the phenomenon which suggests the phonological form [jɪ] is *yi*, and consequently it is better considered as an example of neutralization of the phonemes *e* and *i* before the word-initial [j]. (2) Diachronically, both Sibe word-initial [jɪ] and [ʔi] mainly descend from Classical Manchu *i* or *e*. The distribution of Sibe word-initial [jɪ] and [ʔi] which descend from Classical Manchu *i* is determined phonologically by whether there is a sibilant in the word stem, whereas the distribution of Sibe word-initial [jɪ] and [ʔi] which descend from Classical Manchu *e* is determined lexically.

（おう・かいは　嶺南師範学院）